

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720302

研究課題名(和文) 異文化問題としての「大東亜共栄圏」の研究

研究課題名(英文) A study on Cross cultural aspects on Great Asian Co-prosperity Sphere

研究代表者

河西 晃祐 (Kawanishi, Kosuke)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：10405889

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は当該プロジェクトにおいて、今までほとんど研究が進んでこなかった大東亜共栄圏における異文化接触という課題に取り組んだ。この課題に取り組むためには、外務省外交資料館や防衛省防衛研究所、公文書館などの行政資料だけではなく、陸軍省の発行していた『南方画信』や徴用作家らの作品、戦後の回想録など多様な資料の収集が必要であり、この三年間余りでその資料整理を進めてきた。

さらに具体的な研究成果としては、現在、講談社メチエの一冊として本プロジェクトの成果として『(仮)大東亜共栄圏と近代日本 異文化体験の時代』の執筆を行っており、2015年度中に刊行する予定である。

研究成果の概要(英文)：I have studying a new topic about cross cultural aspects on Great Asian Co-prosperity Sphere, which has been overlooked for many years. This topics required to collect many not official historical records which were not collected by National Archives. Now I am writing a book on this projects whose name is Great Asian Co-prosperity Sphere and Modern Japan. This book will publish on March, 2016.

研究分野：歴史学

キーワード：大東亜共栄圏 異文化接触

## 1. 研究開始当初の背景

大東亜共栄圏研究は、1970年代以後おもに経済史分野から研究が進められ、80年代からは構想・思想面に注目が集まり、90年代以降には政治・外交、2000年代以降には文化面への着目が進みつつあるが、イデオロギー色の強いテーマとして忌避されてきた事もあって、年数十本の論文が発表される満洲研究に比べれば蓄積は薄く、その結果、大東亜共栄圏は実態を持たない、空想に過ぎなかった構想だと捉えられてきたことは否めない。

だが戦後60年以上を経過し、すでにイデオロギー対立自体が過去のものとなりつつある以上、その内実を明らかにすることには大きな意味があるはずである。

特に本研究課題である、異文化交流、異文化接触の場としての大東亜共栄圏という視点は、200万人以上の「日本人」が1年以上にわたって東南アジアでの実地生活を送ったということから考えても、近代日本史上最大の「国際化」時代であったとみるべきであり、その点の解明が必須となると考えた。

以上が、申請者が当プロジェクトを開始した背景である。

## 2. 研究の目的

申請者は2012年3月刊行の『帝国日本の拡張と崩壊「大東亜共栄圏」への歴史的展開』(法政大学出版会)において、1970年代の矢野暢氏の研究以来行われてこなかった通史的分析を行い、大東亜共栄圏を従来の「解放論」でも「植民地延長論」でもなく、1930年代までにすでに欧米植民地支配に抗う技術を身につけていた東南アジア各地の政治主体と、帝国日本の脱植民地化闘争の舞台として考察した。

だが十分に組み込むことができなかった課題も残った。例えば文部省民族研究所員であった小山栄三は、1944年当時に次のように発言している(小山栄三『南方民族と人口政策』大日本出版株式会社)。

満洲事変以前までの日本人は殆んど異質民族に対する認識を持たなかった。単に上流階級又は学者の一部が洋行の名の下に異質民族に接したのであるが、それらの多くはホテルの窓と自動車の窓から異質民族を眺めてゐたに過ぎなかった。然るに現在では幾百万の日本人が兵として上の階級から下の階級まで血を流しながら異質民族を体験してゐる

ここで小山が指摘したのは、大東亜共栄圏構想がもたらした異文化接触の態様が、それまで近代日本が経験してきた植民地支配とも根本的に異なる、という側面であった。実

際にも、大東亜共栄圏とは、明治維新以来はじめて日本の首相に東南アジアの政治主体と直接交渉を行なう機会を与え、農村出身の一兵士をも南方に渡らせて、自己の内面に閉じこもうとする私小説家らに南方での生活を送らせた場であったことの意味であろう。

これは「大東亜共栄圏」が決して、空虚な存在ではなかったことを示しており、このような視点から大東亜共栄圏を分析する意義は大きいと考えた。

従来の研究においてもこのような視点で大東亜共栄圏を捉えた研究はなく、公的史料とは言い難い史料群を収集、目録化しそれを一般に公開する事の意味も、今後の研究の進展のためには必要な作業であると考えた。

## 3. 研究の方法

### (1) 基礎資料収集について

大東亜共栄圏における異文化問題というテーマは、上述のように先行研究自体が存在せず、史料収集から始めていく必要があった。まず公的文書としては防衛庁防衛研究所や外交史料館、公文書館等の史料所蔵調査を行ったが、このような公的機関に残されているのは、あくまでも行政文書中心の「公的史料」であり、それのみでは異文化交流といった課題を明らかにすることは出来ないことが見えてきた。

またそれに加え、所属大学である東北学院大学にも大量の学徒動員関係史料が残されていることも判明し、その史料整理も進めながら、学徒出陣者らが体験した東南アジアという観点の必要性も見えてきたが、それだけでも十分ではなかった。

そこで、このような公的史料以外に、徴用された画家らを書き手とした陸軍省発行の『南方画信』や、日本画家らが描いた戦争画や絵ハガキ、さらには太平洋戦争中に東南アジアの情報を大量に掲載していた朝日新聞社の『アサヒグラフ』といった、公的文書とは呼ぶことのできない史料群を大量に収集整理する事を行った。

このような非公式資料を収集した史料館や復刻史料集は存在せず、研究のための基礎資料として、個別の図書館を訪問し、また古書店などから購入する必要があった。現在もその目録化を進めており、その成果は下記書籍に掲載する予定である。

### (2) 研究成果の公開

申請者は現在執筆中の書籍『(仮)大東亜共栄圏と近代日本 異文化体験の時代』のために、積極的に学会報告"Cross Cultural Aspects of Dai-Toa Kyoei Ken (Greater East Asia Co-Prosperity Sphere)", (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター2014年度夏季国際シンポジウム、2014年7月11日)な

どを行い、質疑応答の機会を得ることでその内容を更に深化させることを試みてきた。

#### 4. 研究成果

本研究課題の成果としては、現在執筆中であり、講談社からの刊行が決定している『(仮)大東亜共栄圏と近代日本 異文化体験の時代』(講談社メチエ、全六章、400字詰め原稿用紙換算で600枚程度の分量となる予定、2015年度刊行予定)が最大のものとなる。

現在執筆中であるので、研究内容の保護という観点からも、その内容の詳細を先に述べることは残念ながらできない。

だが、次のような諸点が明らかとなったことは特筆すべき研究成果ということができるとしている。

本書においてはまず、従来の松岡洋右研究を踏まえながら、その「勢力圏」構想という意味と、南方独立計画の関わりを明らかにした。この点に関しては特に三国同盟締結時の大東亜共栄圏構想の目的が、どのように達成され、その後どのように変化していったのかに着目している。

日独伊外交、日米交渉、日ソ交渉における大東亜共栄圏構想の意味を明らかにできた。従来日米交渉や日ソ交渉における大東亜共栄圏問題については、ほとんど研究が進んでこなかったが、その点を進展させることができた。

大東亜共栄圏構想における「八紘一宇」言説の展開についても、従来にない視点を提供している。より具体的には1930年代後半からの「八紘一宇」が言及された文脈を分析する事で、本来無関係であったその用語が、どのように大東亜共栄圏構想に組み込まれたのかについて、新しい視点を提示する事が出来た。

南方徴用作家らの作品を通じて、異文化接触の様態を明らかにした。たとえば徴用された井伏鱒二はマレー・シンガポール作戦に従軍したが、その視点は他の徴用作家らとも異なる特徴を有していた。その点を神保光太郎などと比較検討できた。

東條英機ら政策決定過程者の異文化認識の問題性を明らかにすることができた。より具体的には、東條内閣期に進められた南方の独立許与という政策的成果の蔭には、東條の東南アジアの諸民族を「嬰兒」扱いはするよう認識があったことを指摘した。

この三年間の間に大東亜共栄圏にかかわるいくつかの書籍が刊行されたが、いずれもそれを異文化接触という観点から捉えるものではなく、本課題の成果となる次著の意義

は非常に大きい。

なおすでにその成果の一端は、2014年7月の北海道大学スラブ・ユーラシアセンターでの英語報告によって公開し、現在は英語書籍の一部として原稿を入稿しており、初稿校正をすでに経ている。同書は今年度中に刊行される予定である。

またその他にも関連成果として、朝日新聞社『週刊 新発見!日本の歴史』43号への寄稿や、『アジア・太平洋戦争辞典』(吉川弘文館、第一稿校正段階、出版年未定)の項目執筆を挙げる事が出来る。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

河西晃祐「東北学院に残された学徒出陣史料について」『東北学院資料室』、査読なし、13号、2014年4月、2-5頁(二段組み)

〔学会発表〕(計1件)

河西晃祐 "Cross Cultural Aspects of Dai-Toa Kyoei Ken (Greater East Asia Co-Prosperity Sphere)", 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター2014年度夏季国際シンポジウム, 2014年7月11日, 北海道札幌市

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

『アジア・太平洋戦争辞典』項目執筆

「綾部橋樹」  
「飯田祥二郎」  
「司政官」  
「土橋勇逸」  
「加瀬俊一」  
「沢田廉三」

「松本俊一」  
「大木惇夫」  
「里村欣三」  
「寒川光太郎」  
「インド国民軍」  
「インド独立連盟」  
「自由インド仮政府」  
「Mohan Singh」  
「Rash Behairi Bose」  
「Subhas Chandra Bose」執筆

河西晃祐「『大東亜共同宣言』の目的は大西洋憲章への徹底対抗だった」『週刊 新発見! 日本の歴史』43号、朝日新聞社、2014年4月、21頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

河西 晃祐 (KAWANISHI, Kosuke)

東北学院大学・文学部・教授

研究者番号：10405889